

地名の由来と史跡と文化財

(東海地区編)



島野 島穴神社

ふるれんネット・いちまる館でダウンロードできます

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

令和3年4月編集・製作

まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちはら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社とされますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社とされます。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていたのですが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「東海地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



市原郡内の東海地区の地名の由来

千葉県の地名の由来

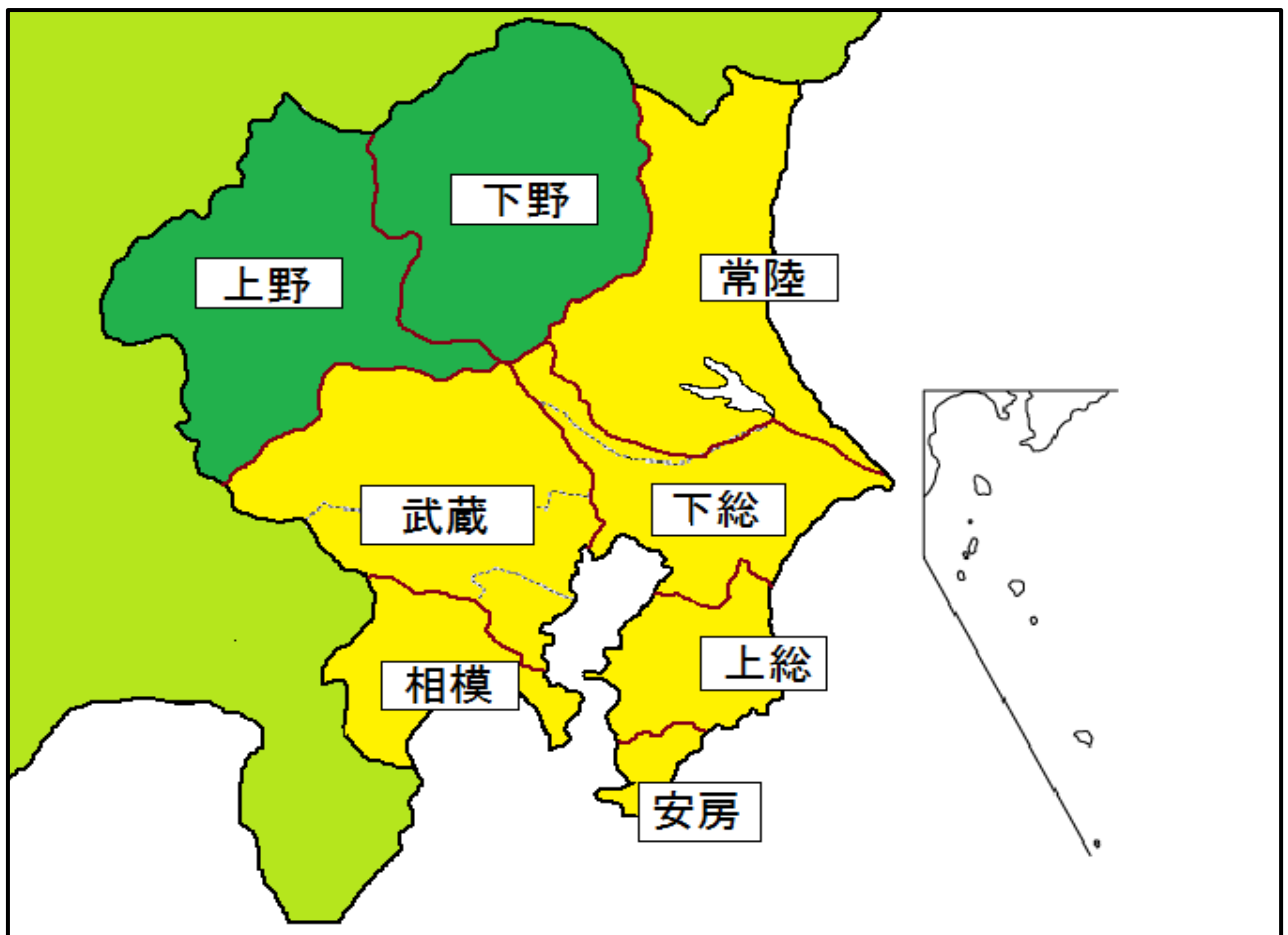
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原市の地区別地図

020/9/26

行政区-scaled.jpg (1829×2560)



市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の6郷

1・海部郷（あまのこう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

2・市原郷（いちはらこう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

3・湿津郷（うるつこう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「字流比豆」、東急本では「字留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な湧泉があることから命名された地名と思われる。

4・江田郷（えだこう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

5・菊麻郷（くくまこう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

6・山田豪（やまだこう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

東海地区 （飯沼・今富・海保・神代・小折・島野・十五沢・廿五里・野毛・西野・引田・町田・柳原）

概説

往古、海上郡（旧上海上国）に属し、その郡名も改められ「海保郡」と称した事もあったが、寛文年間（1661年）以前に市原郡に合併された。

古来より当地区はかなり栄えていたと思われる。特に、海保地区には「上海上国造」の墳墓と思われる八幡台古墳があり、国造が当地に住んでいたという伝説もある。また、公家の台や御腹台と呼ばれる所がありさらには「海保神社」「森巖寺」「遍照院」等の神社仏閣や出羽三山信仰に基づく県下最大級の大塚（供養塚）があることから、往時の興隆が窺える。

一方、延喜式内社上総国5座の一つに数えられる「島穴神社」のある島野は、往時の交通の要路で、大宝令に基づく駅馬・伝馬の制度により駅馬が置かれ、古くから開けた所であった。

「島穴神社」の祭神「志那都比古尊」は、風の神で日本武尊が走水で暴風雨に襲われた時、この神に助命を祈られたので、無事上陸後これを祀ったと言われている。源頼朝が下総へ兵を進める時に、島穴神社に神田36石を寄進したと言われ、また、松平定信は自筆の扁額を奉納した。

廿五里にある宇佐八幡神社にも頼朝伝説がある。同神社明細帳には「鎌倉公はなはだ崇敬篤く、年毎に幣帛を奉ずるを以て使者を遣はさる。当時鎌倉を距てること二十五里、今「津井比地」なるを以て村名に名づく」とあり、廿五里の地名の由来が、鎌倉からの距離による事が窺える。

江戸時代においては、東海地区は細かく分割され大部分が旗本の知行や代官の支配地になっていた。

明治に入ると6年の区制実施による大小区分画、11年の郡区町村編制法の施行法及び17年の戸長役場所轄区域の更定が行われた際に、千種地区の一部村を含めた形で合併・分割を繰り返してきた。

これは千種村の一部村と農業用水施設の共同利用等において密接な関係を有していたことによるものと思われる。

明治22年の市制及び町村制の施行に伴い、廿五里、野毛、町田、海保、島野、飯沼の6村が合併して東海村が誕生した。

その後、昭和28年制定の町村合併促進法に基づき、29年11月に五井町と合併した。



海保 大塚ばやし （千葉県指定無形民俗文化財）

飯沼 (いいぬま) 神社・寺院・史跡文化財・城址 春日神社・龍昌寺(曹洞宗)・

江戸期は飯沼村。中世の入沼郷にあたる。古代には、稲庭と呼ばれた。

地名の由来は、稲庭は「いな(砂)・にわ(場)」で、砂場という意味。現代の飯沼は「うえ(上)・ぬま(沼)」の転訛で、高い所の沼沢地という意味。

春日神社 (かすがじんじゃ)

所在地 市原市飯沼字宮ノ根19番地

創建時期 永和年間(1375年~1379年)頃

祭神 経津主命・天児屋根命・建御雷之男命
比賣大神 神紋 右三つ巴

宮司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。永和年間に大和国春日大社から勧請された。境内に八雲神社(建速須佐之男命：石祠) 愛宕神社(火産霊命：石祠) 浅間神社(木花佐久夜比売命：(石祠) 疱瘡神社(障神：石祠) 道祖神社(岐神：石祠)がある。

島野春日神社本殿建物



境内入口の鳥居と参道の石畳



手前の拝殿の奥に本殿の建物



拝殿内部



境内に祀られる5社の石祠



境内に浅間大神の石碑と鳥居



お清め用の手水鉢と建屋

薬王山龍昌寺 (やくおうさんりゅうしょうじ) 曹洞宗

所在地 市原市飯沼字馬台888番地

創建時期 天仁元年頃

本尊 不詳

住職 松原 敏行

由緒・伝説 本尊は、聖徳太子が彫った三体の仏像の内の一つで救世観音像。太子が人々を救おうと難波の海に沈めたところ、養老川の河口に流れ



龍昌寺の本堂の建物

着いた。500年後の天仁元年、龍昌禪師が春日明神の夢のお告げを見て発見したという。当地には、太子にまつわる地名が残されている。往古黒駒に乗った太子がこの地に馬で立っていた所ということから「風+馬」馬台という地名がついた。また森山という地名は、守屋魔をなさんと霞の中に姿を現さず、霞と共に消えると霞が晴れたことから、守屋魔のうち、日翳原（ひえいはら）と呼んだ。（翳原とも）



龍昌寺境内に建つ聖徳太子



聖徳太子堂の入口の扁額



龍昌寺本堂の入口の扁額



龍昌寺本堂内に祀られる祭壇



境内に祀られる六地藏と石仏



龍昌寺の鐘楼と釣り鐘

今富（いまとみ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 八幡神社・円満寺・正光院（真言宗豊山派）
 祥雲寺・秀善寺（曹洞宗）・円満寺石造宝篋印塔・木造不動明王坐像・今富古墳
 上海上国造との関係が推定される今富廃寺跡がある。鎌倉期は今富保、江戸期は今富村。今留村とも書く。
 地名の由来は「いま（新しい）・とみ（富み）」で、豊かに成る事を願って命名した探勝地名。

八幡神社（はちまんじんじゃ）

所在地 市原市今富字宮台742番地

創建時代 不詳

祭神 誉田別命 神紋 左三つ巴

宮司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。創建年代・由緒不詳。

今富八幡神社の本殿建



境内に、金刀比羅神社（金山彦命：石祠）淡島神社（少彦名命：石祠）疱瘡神社（素盞鳴命：社）八坂神社（建速須佐之男命：石祠）太神宮（天照皇大神：石祠）がある。



境内入口の鳥居と石の階段



拝殿入口に掲げられる扁額



天照皇大神を祀る神社の石祠

円満寺 (えんまんじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市今富692番地
創建時期 文禄3年(1594年)
本尊 不詳
住職 田中 顕文

由緒・伝説 文禄3年に円満上人によって開山。本尊は不動明王で、本寺は今富村に住んでいた根本藤右衛門平清胤で、先祖代々の菩提を弔うために開基された。

境内には、市原市して文化財の石造宝篋印塔と木造不動明王坐像が安置されている。

市原郡四国八十八か所霊場の第20番札所となっています。

今富円満寺の本堂建物



円満寺境内入口の石塔と地藏様



文化財の宝篋印塔と石仏



円満寺本堂の入口

円満寺 石造宝篋印塔 (市原市指定文化財)

所在地 市原市今富692番地
所有者 円満寺
種類 建造物
説明 現存する高さが1.1mに中型の宝篋印塔。相輪部はなくなっているが、外側に傾斜した隅飾りが室町期の特徴を示している。輪郭のない塔身などの各部に関東で造られた関西式宝篋印塔の特色を持ち、特に基礎側面輪郭内の紋様は他に例を見ない珍しいもの。「天文十六年」(1547年)の紀年銘があり円満字歴代阿闍梨の供養塔と考えられる。



円満寺 木造不動明王坐像 (市原市指定文化財)

所在地 市原市今富692番地
所有者 円満寺
種類 彫刻
説明 ヒノキ材の割矧造りで、像高46cmの仏像です。像内には元禄4年(1691年)の修理願文1通と木造不動明王坐像を納め、さらにその元禄像胎内にも銅造不動明王坐像一体を納めている「一身三体仏」と



いう熱い信仰に基づく特異な不動明王像です。的確な肉付けや控えめながら力感のこもる表情などから、南北朝時代の作と推定され、市内では最古の不動明王坐像です。

正光院 (しょうこういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市今富726番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 廣瀬 秀明

由緒・伝説 創建時期不詳ですが、境内敷地内に今富塚山古墳がある。境内入口の石門右脇に「庚申塔」の石塔が祀られる。



正光院の本堂の建物



正光院境内入口の石の門



入口の右側に祀られる庚申塔



今富塚山古墳の案内標柱

立野山祥雲寺 (たてのさんしょううんじ) 曹洞宗

所在地 市原市今富971番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 中村 知己

由緒・伝説 曹洞宗千葉県宗務所として開設されている寺院で、僧侶の研修なども行われている。

祥雲寺の本堂の建物



祥雲寺の入口の門柱



本堂の左側を撮影



境内の墓地に並ぶ江戸期の墓石

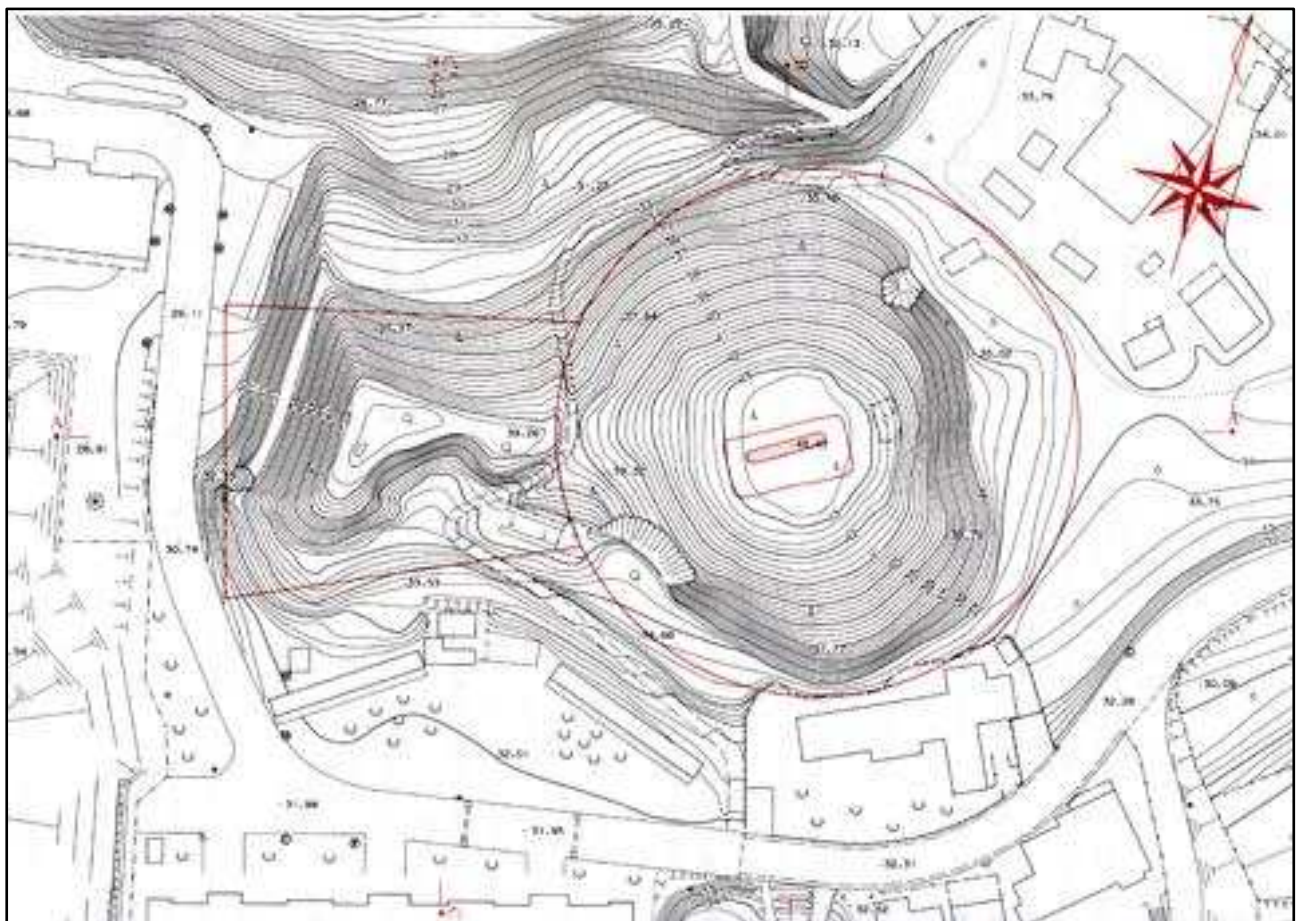
今富塚山古墳 (いまとみつかやまこふん)

所在地 市原市今富字本郷762番地(正行院境内)

築造時期 古墳時代前期・弥生時代と思われる

埋葬者 不明

説明 今富塚山古墳は、養老川下流左岸に築かれた大型の前方後円墳で、墳丘の推定全長は110mで、現存する高さは8mです。残念なことに、発掘調査以前の土取りの為墳丘が大きく破壊されている。1971年頃に墳丘の破壊が明らかになった時、後円部の断面に木炭層が確認されていることから、盛土内の埋葬施設に木炭が使われていることが分かっている。副葬品については不明ですが、後年の調査では周溝などから、焼く前に底を抜いた臺形土器の破片が出土している。外反りする二重の口縁部を持つ臺の特徴と、大きく高い後円部を持つ墳丘から、古墳時代前期に築造されたものと考えられる。



今富塚山古墳示す標柱



墳丘の途中には墓石などが



前方部より後円墳を眺める



前方と後円部の間の切通し



本堂手前の前方部の削られた部分



後円部から前方部を眺める

海保 (かいほ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 海保神社・遍照院学道寺(真言宗豊山派)・森巖寺(曹洞宗)・木造千手観音菩薩坐像(市指定文化財)・大塚ばやし(県指定文化財)・海保城

江戸期は、海保村。当地は、古代海上郡域に属したが古代末期同郡が南北に分かれ、海北・海南両郡が成立したと推定され、地名の海保は海北の遺称と考えられている。

「海上とは南の畔」という意味。

海保(八幡)神社 (かいほじんじゃ)

所在地 市原市海保字八幡台 879 番地

創建時期 白鳳2年(673年)の鎮座

祭神 誉田別命・大山咋命

宮司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。白鳳2年(673年)の鎮座で、元は八幡宮と称した。一説によると千葉介常胤は、秩父太郎重弘の女を娶っていたが、重弘から源義家から先祖が給わったという白幡を譲られた。その白旗は海上の家に伝わり海保賢胤は、海保殿の塚に納めて八幡宮と合祀したという。江戸時代に、小出越中守墳墓の東に遷座。明治元年(1872年)に八幡神社と改称。大正4年(1915年)日枝神社(字山王下:大山咋命)を合祀。日枝神社は宝徳3年(1451年)字山王台に創祀、山王宮と称した。大正4年海保神社に改称。境内に祓戸大神(石碑)がある。

海保神社の本殿建物



海保神社境内入口の鳥居



海保神社の本殿建物と塀柵



拝殿入口の上に掲げられる扁額



拝殿の前に掲げられる奉納額



境内に祀られる日枝神の石碑



慶應2年に奉納された狛犬

海保山泉龍院森巖寺 (かいほさんせんりゅういんしんがんじ) 曹洞宗

所在地 市原市海保字辺田小路686番地

創建時期 弘安年間(1278年~1288年)

本尊 不詳

住職 田旗 孝夫

由緒・伝説 森巖禅寺ともいう。創建は弘安年間と言われ、蜀の人・勅使大覚禅師蘭溪和尚の創設で、当初は海保山泉龍寺と称した。本尊の千手観音は蘭溪禅師が日本に渡る際に、宋の皇帝から海上安全の為に拝領したものと言われている。徳川家康の息子・結城秀康の菩提を弔うために慶長年間に中興開基となり、ご位牌は寺宝となっている



森巖寺の本堂の建物



森巖寺入口の階段と山門



なやみきく観音様の祠



本尊の千手観音を模した供養



水子供養地藏尊の石像



多くの悩みを聞く六地藏様



参道左側に祀られる地藏様

森巖寺 木造千手観音菩薩坐像 (もくぞうせんじゅかんのんぼさつざう) 市原市指定文化財

所在地 市原市海保686番地
所有者 森巖寺
種類 彫刻
説明

この仏像は、ヒノキ材の寄木造りで、像高32.8cmです。十一面四十二臂(はい)の千手観音で、地元では「北向き観音」とも呼ばれている。南向きの善光寺と向き合っている所から名づけられ、このご利益は一体のものという意味がある。一尺余りの小ぶりの像ですが、精彩のある彫法で表された装飾的な像容は、中世鎌倉で流行した宋代様式に通じており、南北朝時代の佳作です。その生々しい表情を見せる面貌にも慶派の影響が見られ、当時の造像の実情を窺わせる作例として重要な仏像。
(いちはら 歴史の旅人より引用)



発教山遍照院学道寺 (ほつきょうさんへんしょういんがくどうじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市海保769番地
創建時期 弘仁2年(811年)
本尊 不詳
住職 廣瀬 顕文
由緒・伝説 当院は弘仁2年に弘法大師の開基として創設されたと伝えられる。その後長く廃寺となっていたのを佐々木盛綱の息子で僧であった房玄上人が老後当時領主であった佐々木盛唯とその兄弟らと協力し再興したと言う。当時佐々木氏は海保字切生に城郭を持ち、若干の寺領を寄進したという。応長元年(1311年)に現在地に建立した。文禄2年(1593年)に火災で本堂などを焼失したが、慶長7年(1602年)に現在の本堂を再建。
当院の十一面観世音菩薩は、新上総国三十三観音の28番札所でもあり、また市原郡四国八十八霊場の51番札所です。

遍照院学道寺の本堂建物



境内入口の寺院の寺標



本堂入口に掲げられる札所看板



本堂の建物を右側から写す

大塚ばやし (千葉県指定無形文化財)

所在地 市原市海保
所有者 大塚ばやし保存会
種類 無形民俗
説明

出羽三山信仰に基づいて、梵天納めの日(20年に一度)に奉納されていたとされるお囃子で、現在は海保神社の祭礼日などに演じられている。
大太鼓1・小太鼓2・笛1・鉦1で構成で、神田ばやし系統の曲目ですが、大鼓の動作が大きく派手なのが特徴です。

大塚ばやし保存会が結成されており、祭礼以外でも演じられている。



海保城址 (かいほじょう)

所在地 市原市海保字公家の台
築城時期 平安時代
築城主 源頼光が居城していたという。
説明 海保城は成立が古く、平安時代に源頼光が居城していたという伝承がある。その後に海保頭三位中納言盛直が城主となっていた。長徳2年(996年)、源頼信との戦いで敗れたという。後、鎌倉時代になると、海上与一常衝が城を構えたという。海上常衝と言え、銚子の中島城の城主ですが、この地にも城を領地に持っていたと思われる。



海保堀ノ内館 (かいほ ほりのうちやかた)

所在地 市原市海保字堀ノ内
築城時期 不明
築城主 中世の地元領主の居館と思われる。
説明 森巖寺の南300m程所を「堀の内」と言い、中世の城館があったという。現状では数軒の民家の敷地になっているが、明確に城館の遺構と思われるものは残っていない。「市原の城」によれば、方形に水路が巡らされており、これが城の堀の名残と思われる。
また、北側にAの張り出しが描かれていて館の設計の新しさを窺えるが、館跡の北側一帯は、その後の区画整理が行われており、Aのような張り出しは確認できない。



神代 (かじろ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 神代神社・神光院(真言宗豊山派)・神代城址
 梶路とも書く。戦国期は梶路郷、江戸期は神代村。里伝によれば、村は古来の神地で神代の神が鎮座した当初は23戸だけだったという。貞観10年(868年)に従五位上を授けられた神代神社があり、地域を中心にこの古社が座していることから、地名は当神社にちなむと思われる。「神代」は「かくみ・こうしろ」とも読み神田と同義と言われている。古来は「かわらい」と読み、祝詞では「かみやらい」と読まれる。また、「かじ(掻)・しろ(湿地)」の転訛で、過去の土石流の堆積地や崖の崩壊地のある湿地という意味か。

神代神社 (かじろじんじゃ)

所在地 市原市神代字宮越265番地
 創建時期 景行天皇40年(110年)に創祀。
 祭神 天照大日靈尊 相殿 保食神
 宮司 和田 武章
 由緒・伝説 旧郷社、国史現代社。景行天皇40年に創祀されたという。元慶元年(877年)に従五位上に昇叙されている。
 日本武尊の東征の際、開墾し村を作り、社を建てて祀ったのが創始という。
 境内に日枝神社(大山咋命)・山祇神社(面足命・惶根命)・弁財天(市杵嶋姫命)が祀られている。



神代神社の拝殿の建物と厄払いの狛犬



境内入口の朱塗りの鳥居と参道



拝殿(左側)と幣殿(中央)、本殿(右側)

稲荷山神光院 (いなりさんしんこういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市神代314番地
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 田中 顕文
 由緒・伝説 創建時期・由緒は不詳ですが、市原郡四国八十八霊場の32番札所となっている。

神光院の本堂の建物





本堂左側に祀られる地藏様



本堂建物を右側から撮影



境内の本堂奥には墓石群

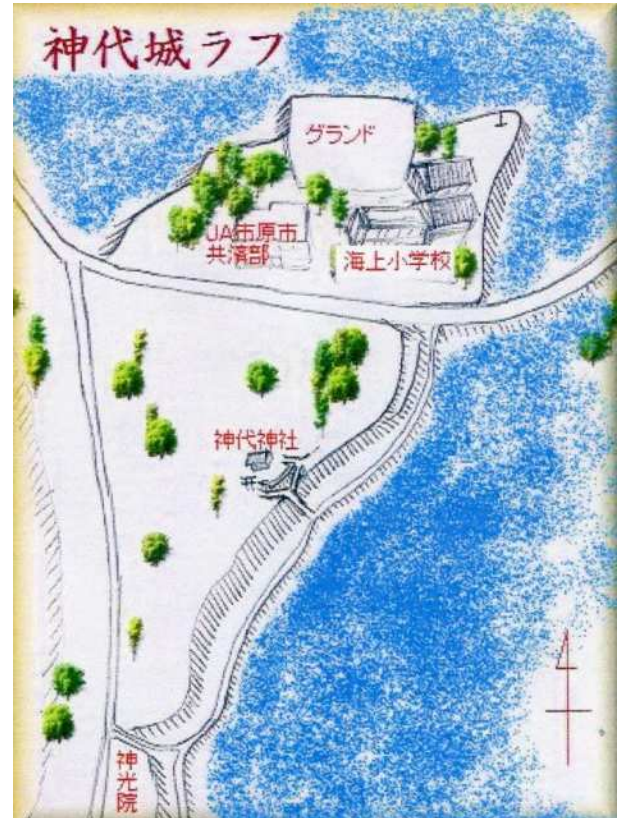
神代城址 (かじろじょう)

所在地 市原市神代字殿屋敷・本郷・切遠

築城時期 不明

築城主 不明

説明 神代城は、分目要害の500m西にあったと言われる。海上小学校や農協、神代神社などのある台地が神代城址と言われている。確かに小学校のある台地は、水田地帯に突き出した比高6mほどの土手になっており、いかにも城塁のように見えます。農協前付近は殿屋敷と呼ばれ、城址の一部で比高は5～6m程あり、周囲の湿地帯に堀を巡らせていた。農協前バス停の南側の高台部が本丸と思われ、その南側に神代神社が祀られている。バス停北側の海上小学校辺りが二の丸の跡と思われる。一説によると、椎津城の出城の一つだったという説がある。



海上小学校の北東先端の城塁址



神代神社の周囲には土塁状の部分

小折 (こおり) 神社・寺院・史跡文化財・城址 大宮神社

江戸期は、小折村。柳原村の枝郷。地名の由来は、「郡(こおり)」の意で、古代海上郡の郡衙所在地の推定地と思われる。または「ふる(古)・おり(降る)」の転訛で、崖が降りる、すなわち地滑りが発生したことを伝えるものか。

大宮神社 (おおみやじんじゃ)

所在地 市原市小折字小折4番地
 創建時期 不詳
 祭神 大己貴命
 宮司 和田 武章
 由緒・伝説 旧村社。創建時期、由緒不詳。北拝。

小折大宮神社の本殿建物



小折神社入口の朱塗りの鳥居



神社の入口



境内に祀られる疱瘡神の石祠

島野 (しまの) 神社・寺院・史跡文化財・城址

島穴神社・宝前院(真言宗豊山派)・
 善竜寺(顕本法華宗)

南北朝期は島穴郷。戦国期は島之郷。江戸期は島野村。地名の由来は、島穴村と馬野村が合併して成立したことによるが、島穴の転訛とも考えられる。12代景行天皇の頃、日本武尊が東征の前から地名はあったとされ、尊がこの地に「志那都比古命(しなつひこのみこと)」を祀ったのが島穴神社の始まりという。また、島穴は「しま(集落)・あな(窪地)」で、窪地にある集落という意味。馬野は「うめ(埋)・ま(間)・の(野)」で、養老川が運んできた土砂の堆積地と台地の間にある原野という意味。

島穴神社 (しまあなじんじゃ)

所在地 市原市島野字島穴1129番地
 創建時期 景行天皇40年(114年)と伝承
 祭神 志那都比古命
 相殿 日本武尊・倭比売命
 神紋 十六花卉菊・五七桐
 宮司 和田 武章
 由緒・伝説 旧県社。式内社。姉崎神社の神と夫婦とも姉弟とも言われている。景行天皇40年に

島穴神社の拝殿の正面



日本武尊が東征の際、海神の怒りを鎮めるために身を捧げた弟橘姫が「無事に東国に着いた際は、風鎮めの神を奉ります」と、大和の風鎮めの神に祈っていたので、尊が風神・志那都比古命を祀った。のちに景行天皇が御東幸の際、日本武尊・倭比売命を合祀。天慶3年(940年)には平将門降伏の勅願を任せられたという。
 また、旧跡(元宮)があり、現在地の後方左200m程離れた水田の中に老樹が繁る森で、天長3年(826年)に社殿を遷祀したという。

「島穴」の社名は鬱蒼とした森の中に深い穴があり、そこに清風が流れていたことから「風神」が祀られるようになったという。旧跡は古墳の崩れたものとの見解もあり、古墳（島）の盛り土が崩れて剥き出しになった石室（穴）から名付けられたという説もある。

大正4年古川神社（字古川：月夜見命）・十七夜神社（字海保：月夜見命）を境内社八雲神社に合祀、道祖神（字第六天：八衛比古命・八衛姫命・久那斗命）を境内社道祖神に合祀。境内に道祖神社（塞神三神：石祠）八雲神社（建速須佐之男命）子安神社（木花佐久夜比売命：石祠）・水祖神社（罔象女命：石祠）・加具土神社（加具土命：石祠）・淡島神社（大那牟遲命、少彦名命：石祠）・疱瘡神社（塞神三柱）が祀られている。



境内入口に建てられた第二鳥居



神社本殿を右側から撮影



老中松平定信書の扁額



八雲神社の鳥居と奥に社殿



浅間神社の鳥居と奥に石祠



淡島・愛宕・子安神社の石祠



天神社の鳥居と奥に社殿



お清め用の水手舎



社殿再建を祈念を記した石碑

宝前院 （ほうぜんいん） 真言宗豊山派
所在地 市原市島野 1196番地
創建時期 不詳
本尊 不詳
住職 田中 譲二

宝前院の本堂建物



由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。
市原郡四国八十八か所霊場の62番札所。



境内入口の社殿が祀られる



江戸時代からの墓石を集め祀られる



法性山善竜寺 (ほうしょうさんぜんりゅうじ) 絹本法華宗

所在地 市原市島野707番地
創建時期 永禄年間と思われる
本尊 不詳
住職 橘 無我
由緒・伝説 由緒不詳

善竜寺の本堂の建物



善竜寺入口の石門



金川原・七ツ町・塚原村の供養塚



善竜寺の本堂入口の扁額

十五沢 (じゅうごさわ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 八幡神社・高澤寺(真言宗豊山派)
江戸期は十五沢村。文禄年間以降(1592年~1596年)に新生村から分村して成立。
地名の由来は、「もち(傾斜地)・さわ(沢)」の変化したもので、満月が十五日頃であることから、
「十五=「もち」で傾斜地を指す。

白幡神社 (しらはたじんじゃ)

所在地 市原市十五沢字川端193番地
創建時期 不詳
祭神 大鷦鷯命
宮司 和田 武章
由緒・伝説 創建時期・由緒不詳

白幡神社の本殿建物





白幡神社境内入口の鳥居と参道



境内に時代を感じる手水鉢

十頭天王社の石祠



高澤寺 (たかざわじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市十五沢 2 2 5 番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 田中 顕文

由緒・不詳 創建年代・由緒不詳。



高澤寺本堂入口の扁額



高澤寺の共同供養塔



境内入口に祀られる地藏様

廿五里 (ついへいじ) 神社・寺院・史跡文化財・城址

若宮八幡神社・宇佐八幡神社・
東泉寺・恵光院 (真言宗豊山派)

戦国期は津比地 (つひじ)、江戸期には津以比地 (ついひじ)、二十五里とも、露乾地 (つゆひじ) とも書いた。江戸期は廿五里村。低地の為養老川洪水の災害を度々被るため移転すること二、三度は普通であったため、昔は漂流常なりとの伝説があった。

地名の由来は、鎌倉から 25 里の里程にあった事にちなむことによるという伝承があるが未詳。この地の東泉寺にあった縫仏 (刺繍の仏像) が霊異を起こし、これを崇敬していた源頼朝が毎月焼香の使いをよこした。その距離が 25 里であったという説もある。

また、「す (洲)・ひじ (泥地)」の転訛で、養老川の運んできた土砂の堆積地で、泥湿地という意味か。または養老川の曲流部を人体の肘に例えて指したもののか。また地元の人「ついじ」称しており「築地」で川の氾濫を抑えるために土手を造ったことにちなむか、石が多く混ざるゴリゴリした土地であったことから五里×五里=二十五里で廿五里と変化したものか。

若宮八幡神社 (わかみやはちまんじんじゃ)
 所在地 市原市廿五里字宮ノ下 86 番地
 創建時期 貞観年間 (859 年～877 年)
 に勧請という。
 祭神 大鷦鷯命
 宮司 和田 武章
 由緒・伝説 旧村社。貞観年間の勧請という。
 境内に松尾神社 (大山咋命)・疱瘡
 神社 (塞三柱神) が祀られる。

若宮八幡神社の本殿建物



神社入り口の参道と鳥居



若宮八幡神社本殿入口



神社の本殿内部の祭壇

宇佐八幡神社 (うさはちまんじんじゃ)
 所在地 市原市廿五里字八幡台 1386 番地
 創建時期 貞観年間 (859 年～877 年) の創始
 祭神 誉田別命 神紋 流れ左三つ巴
 宮司 和田 武章
 由緒・伝説 旧村社。男千木。正八幡宮と称す。
 貞観年間に創始されたという。鎌倉時代
 源頼朝が本神社を崇敬し幣帛を奉り鎌倉
 から使者を遣わした。鎌倉から当地までの
 距離が二十五里あることから、当地を廿五
 里と呼ぶようになったという説がある。
 境内には八雲神社 (建速佐之男命：昭和4 年 (1929 年)・道祖神社 (字中ノ新田：岐
 神：石祠)・を合祀。浅間神社 (木花開耶姫命)・松尾神社 (大山咋命)・疱瘡神社 (塞三
 柱神) が祀られている。



宇佐八幡神社の拝殿の建物



宇佐八幡神社の境内入口の鳥居



新社殿の入口と上部の扁額



本殿 (左側奥) と拝殿 (右手前)



境内には子安神社・道祖神・子安神社・。八雲神社・浅間神社・松尾神社・疱瘡神社などの祠が並ぶ



宇佐八幡神社の旧社殿の建物



時代を感じる守り神の狛犬



境内の燈籠や祠の奥に旧社殿

東寶山東泉寺（とうほうさんとうせんじ） 真言宗豊山派

所在地 市原市廿五里65番地1

創建時期 嘉応2年（1170年）に創建

本尊 不詳

住職 廣瀬 秀明

由緒・伝説 当寺は、高倉天皇の時代の嘉永2年に創立して、珠に源頼朝公の信仰篤く、鎌倉より毎月焼香の使いを東泉寺に遣わした。源頼朝は、この寺に置かれる繡仏に靈異を表し、これを崇敬していたと言われている。

なお、当寺の本尊の薬師瑠璃光如来は、行基菩薩の作にしてこの誓い高大成、病苦災難除けのご利益があるという。

東泉寺の本堂の建物



東泉寺の境内入口の門柱



本堂入り口の上部の扁額



本堂の左壁に掲げられる沿革

惠光院 (えこういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市廿五里781番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 田中 顕文

由緒・伝説 創建時期不詳。市原郡四国八十八か所
霊場70番札所となっている。

境内に宝延3年の石仏などが祀られている。

惠光院の本堂の建物



惠光院の正面入口と寺名の扁額



境内いる口に祀られる石碑



境内に祀られる石の地藏様

西野 (にし) 神社・寺院・史跡文化財・城址 熊野神社・徳蔵寺(真言宗豊山派)

江戸期は西野村。貞享4年(1687年)宮原村から分村して成立との説があるが、宮原村枝郷とも。

地名の由来は、親村から見て西に位置することにちなむ。

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市西野字東口238番地

創建時期 不詳

祭神 伊弉諾尊・速玉男命・和津事解男命

宮司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。創建年代・由緒不詳。

熊野神社の本殿の建物



熊野神社入口の鳥居と扁額



熊野神社社殿の入口



社殿の右側から撮影



十二天神社の石祠
仙元大菩薩の石祠



庚申塔の石祠



延命山徳蔵寺 (えんめいざんとくぞうじ) 真言宗豊山派

所在地 市原市西野223番地1
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 田中 顕文
 由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。現在本堂はない。
 市原郡四国八十八か所霊場の19番札所

徳蔵寺入口にある石碑



地蔵仏や弘法大師の石仏



境内には多くの墓石や石仏



宝輪塔が多く並ぶ境内

野毛 (のげ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 白幡神社・法泉寺(顕本法華宗)

室町期は「のけの村」、江戸期は野毛村。

地名の由来は、「の(湿地)・か(異・消)」で、養老川の氾濫により水没する湿地という意味か。

白幡神社 (しらはたじんじゃ)

所在地 市原市野毛字白幡起180番地
 創建時期 創建年代不詳
 祭神 大鷦鷯命
 宮司 和田 武章
 由緒・伝説 旧村社。創建年代不詳。往古この地の民が大鷦鷯命の御神徳を慕い本社を創建したと伝承がある。元は白「旗」神社で大正8年(1919年)に改称。昭和5年(1930年)大水神社(字大水神:弥都波能買命)を合祀。これらは養老川の氾濫から村を守るために祀られた。境内末社に日枝神社(石祠:大山咋命)・天武天皇の石碑が祀られている。

野毛の白幡神社本殿建物



白幡神社入口の鳥居と参道



本殿(左側)と拝殿(右側)



拝殿入口正面



境内の寛政8年奉納の水手鉢



天武天皇や水神宮などの石祠



境内に祀られた石祠群

法泉寺 (ほうせんじ) 顕本法華宗

所在地 市原市野毛399番地

創建時期 不詳

本尊 不詳

住職 橘 無我

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。

法泉寺の本堂の建物



法泉寺入口の山門



法泉寺の本堂入口と扁額



境内に並ぶ墓石群

引田 (ひきだ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 諏訪神社・漣蔵院(真言宗豊山派)・引田城 木造聖観世音菩薩立像(県文化財)

戦国期に引田の地名があった。江戸期は引田村。匹田村・疋田村とも書く。

地名の由来は、「ひく(低)・た(処)」の転訛で、低地という意味。

諏訪神社 (すわじんじゃ)

所在地 市原市引田字諏訪ノ上114番地

創建時期 不詳

祭神 建御名方命・八坂刀売命

宮司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。創建時期、由緒不詳。
境内に八坂神社(健速須佐之男命)が祀られている。

諏訪神社の拝殿の建物





神社境内入口の参道と鳥居



本殿（右側）と拝殿（左側）



道祖神の石祠



八坂大神の石祠



上下諏訪神社より奉納の水手鉢



鳥居の脇に厄除けの狛犬

福王山慈恩寺漣蔵院（ふくおうさんじおんじれんぞういん） 真言宗豊山派

所在地 市原市引田94番地

創建時期 南北朝期と思われる。

本尊 不詳

住職 廣瀬 秀明

由緒・伝説 漣蔵院には、南北朝の板碑があり、平安初期と推定されるナタ彫りの聖観音像が鎮座している。

寺伝によると、平安初期に「慈恩」という僧によって創建されたと伝えられ、本尊の聖観音像は「行基」の作と伝えられている。

市原郡四国八十八か所霊場の18番札所となっている。

漣蔵院の本堂の建物



参道と境内入口の山門の寺標



漣蔵院の本堂正面と扁額



本堂内に祀られる祭壇



県文化財を保管する観音堂



境内に祀られる宝塔や宝篋印塔



享保5年に奉納された手水鉢

木像聖観世音菩薩立像（県指定重要文化財）

所在地 市原市引田94番地

所有者 慈恩寺 所蔵

種類 彫刻

説明 行基作の聖観音菩薩は「引田薬師」と呼ばれ、靈驗あらたかな
仏様として近隣の住民の信仰を集めていたと言われる。

古来、庶民が最も恐れていたのは疫病で、特に「疱瘡」は流行し
始めると瞬く間に感染が広まった。そこで住民は薬師様にお願い
をしたと思われる。

聖観世音菩薩立像は、カヤ材の一木造で高さは105cmです。
ナタ彫りと呼ばれる作風で仕上げ前の荒彫りの段階で丸ノミの
痕を整然と刻んで、木彫独特のリズミカルな表現を生み出しま
す。平安時代前期を過ぎてからみられるこの作風は全国的にも珍
しく、県内では3例が知られていますが、11世紀頃とされる漣
蔵院像は県内で最も美しく気品も備わっています。胴を引き締め、腰を少し左に振る体軀に
も、観音の慈悲が込められています。

（いちはら歴史の旅人より引用）



引田城址 (ひきだじょう)

所在地 市原市引田字西根

築城時期 戦国期

築城城主 不詳

説明 引田城は、万代城ともに神代城の南側の台地上にあり、
いずれも神代城の詰め城だったと言われている。

引田城は、比高20mほどの半島台地の先端部にあり、
空堀り、土塁、虎口なども残っていると記載されている
が、周囲の地形を見てもここに城があったとはいえる
ような遺構は残っていない。

引田城は、宮原交差点の南側辺りから山稜を進んでゆ
くと登り口がある。この尾根道を進んでゆくとDの墓
群に出る。Dの高台の奥には方形の壇があり、古墳を利
用したものと思われる。さらに進んでCの辺りまでゆ



くと直径12m、高さ6mほどの三段構造の古墳で、このようにこの台地上には古墳群があり、古くから高地性の集落が営まれていた場所であった。その先は尾根が細くなり、道の脇が土塁状になっていた。さらに進んだBの辺りから先が城の範囲と思われる。確かにBの辺りは幅広の平坦地となっており、左側には城内との区画を示すように堀状の窪みも見え、その先の右側には畝状の堀切が何本も見える。畝状堀切を掘られた先には塚が一つあり、溝はその参道的一种のようですが、墓への参道として掘られたものとも思える。Aの台地が最先端部にある平場で、道は切通し状になっている。



Bの辺りの畝状に掘られた溝



Cの所にある直径12mほどの古墳

万代城址 (ばんだいじょう)

所在地 市原市引田字木々野・古宿

築城時期 戦国期

築城主 不詳

説明 万代城は引田城と共に、神代城の南部の台地上にあり、いずれも神代城の詰め城と呼ばれている。万代城は、神代城の600mほど南側に、引田城は700mほど南西にあり、この城は小川を挟んで向かい合う形になっている。

万代城は要害と呼ばれている所で比高20mほどだが、土取りによってかなり改変されているために、遺構などは確認できない。

町田 (まちだ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 熊野神社・

戦国期は町田郷、江戸期は町田村。北方の一部を河原と呼び、西南の一部を中島あるいは川瀬と呼ぶ。その間にある水田地帯は古河と呼び、往時は養老川が流れていたため度々水害を被ったという。

地名の由来は「まち(集落)・た(処)」で、集落のある所と言う意味。

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市町田字宮本542番地

創建時期 天正7年(1579年)に創建

祭神 伊弉那美命・速玉男尊・豫母都事解男命

住職 和田 武章

由緒・伝説 女千木。旧村社。天正7年に創建される。大正3年(1914年)八坂神社(字仲町・建速須佐之男命)を合祀。

町田熊野神社の拝殿建物



境内に道祖神（猿田彦命）・淡嶋神社（少彦名命：石祠）・水神社（弥都波能売命：石祠）
 弁短神社（位置杵嶋姫命：石祠）・浅間神社（木花開耶姫命：石祠）が祀られる。
 神事で2月11に奉射がある。



水神社の石祠

八坂神社の石祠

淡嶋神社の石祠

道祖神の石祠

柳原（やなぎはら） 神社・寺院・史跡文化財・城址

大鷲神社・

江戸期は柳原村。もとは小折村と1村だった。

地名の由来は、「や（斜面）・なぎ（薙ぎ払う）・はら（原野）」で、河岸が浸食される所の原野という
意味。

大鷲神社（おおわしじんじゃ）

所在地 市原市柳原字宮ノ脇18番地（現在は字宮ノ根）

創建時期 神武天皇辛酉年（241年）

祭神 天日鷲尊

相殿 神皇産霊尊・高皇産霊尊・誉田別尊・
 大山咋尊・猿田比古命・豊受比賣命
 大宮能賣命

宮司 和田 武章

由緒・伝説 旧村社。神武天皇辛酉年に下柳原に創建。
 崇神天皇の時に再建。養老5年（721年）
 に社殿を再建、建久3年（1192年）に
 現在地に遷座。寛延2年（1749年）に再建。

境内に道祖神社（猿田彦命：建久3年再建、石祠）・疱瘡神社（素盞鳴命：石祠）
 子神社（大己貴命：石祠）・神武天皇遥拝所（石祠、明治4年公布を奉じ修築する。）
 祖霊社（明治年勧請）がある。
 神社の本殿は、現在再建中です。

各神々を祀る社殿





神社入り口の朱塗りの鳥居



神社の厄除けの狛犬

神武天皇遥拝所の石碑



本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
- ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
- ・全国遺跡報告総覧
- ・日本の城郭・城址（千葉県版）
- ・寺社にまつわる伝説（市原市 その2）
- ・市原市・宗教法人一覧
- ・市原の城郭と国府跡をたずねて
- ・Wikipedia- 市原郡
- ・市原市歴史と文化財シリーズ
- ・いちほら歴史の旅人

・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

東海地区の地名の由来と史跡文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満 1020 番地 1

連絡先 090-3545-1113

本資料をコピーする場合は、ふるれんネットのいちまる館をご利用下さい。